

平成19・20年度
荒川区区政改革懇談会

提言書

地域のコミュニティ力をいかに高めるか
～子育て、防犯、福祉～

平成21年3月

目次

I. 南千住地域グループ	1
1. コミュニティ力向上のための課題～気軽な地域活動への参加、交流を～	1
2. 子育て ～子どもと大人・地域との交流を図ろう～	2
3. 防犯 ～年齢や地域の特性、立場を活かしたコミュニティによる防犯の強化～	4
4. 福祉 ～行政の申請主義から福祉対象者掘起し主義へ～	8
II. 荒川地域グループ	10
1. コミュニティ力向上のための課題 ～町会の情報伝達の方法を改善する～	10
2. 子育て ～子どもと地域のつながりを再生する～	11
3. 防犯 ～「犯罪から身を守る防犯」と「犯罪者をつくらない防犯」～	14
4. 福祉 ～孤独のない地域に～	17
III. 町屋地域グループ	19
1. コミュニティ力向上のための課題 ～『少しのおせっかい』ができるまち～	19
2. 子育て ～既存支援メニューの隙間に手が届くサポートを～	21
3. 防犯 ～コミュニケーションを密にし目に見える防犯対策を～	23
4. 福祉 ～少しのおせっかいで困っている人を支援できる環境をつくる～	27
IV. 尾久地域グループ	29
1. コミュニティ力向上のための課題～地域資源を活かしたネットワークづくり～	29
2. 子育て ～地域資源を活用した次世代を担う子どもの育成～	31
3. 防犯 ～皆の目や声が届きやすいまちにする～	33
4. 福祉 ～介護を柱に、地域での相互扶助の仕組みをつくる～	36
V. 日暮里地域グループ	38
1. コミュニティ力向上のための課題 ～困ったときに頼りにできるコミュニティ～	38
2. 子育て ～子育てに必要な場所や支援を親が自由に選べる環境づくり～	39
3. 防犯 ～住民と地域とのつながり強化と区の防犯事業の充実～	42
4. 福祉 ～個人の意向を尊重しつつ、困ったときに支えあえるコミュニティづくり～	44
活動報告	46
1. 平成19・20年度荒川区区政改革懇談会委員名簿	46
2. 活動経過	47

I. 南千住地域グループ

1. コミュニティ力向上のための課題～気軽な地域活動への参加、交流を～

(1)現状

●気軽に地域活動に参加しにくい

- ・ 子どもの登下校時の安全見守りなど地域活動に参加したいが、そうした活動は有償のボランティアや行政と関わりのある人が行っており、気軽に参加できない状況である。

●地域住民が交流できる場が少ない

- ・ 核家族の母親や一人暮らしの高齢者の中には、地域の人と交流したいと思っている人は大勢いる。しかし、気軽に交流できる場が少ない。

(2)コミュニティ力向上のための課題

●誰もが地域活動に参加しやすい仕組み

- ・ 地域のボランティア活動に誰もが参加しやすいようにする。
- ・ そのためには、行政と地域住民との中間的な立場のボランティア組織をつくり、活動に気軽に参加できる仕組みをつくる。

●交流できる場の確保

- ・ 母親たちが買い物等をする際に気軽に子どもを預ける場を設け、その場で交流ができるようにする。
- ・ 高齢者も、その場を基点として買い物をすることで地域の人と交流できるようにする。

具体的なアイデア

○ボランティア活動員登録制度

- ・ 誰もが地域活動に参加しやすい仕組みとして、行政と地域住民の中間的な『ボランティア活動員登録制度』をつくる。
- ・ 区が『ボランティア活動員』への研修を実施し、研修を受けた者に身分証明書となる証書やバッジを発行する。

○子育てコミュニティサロン

- ・ 気軽に交流できる場の確保のため、空き店舗などを活用し『子育てコミュニティサロン』といった場をつくる。
- ・ 空き店舗の家賃負担については、区が補助等により協力する。

2. 子育て ～子どもと大人・地域との交流を図ろう～

(1)現状や問題点

- 地域の子どもの関わりを持つことが困難
- 子育ての家庭が見えない
- 障がい児や病児の増加に対応する準備がない

(2)コミュニティ力向上のための課題

- 子育て支援に簡単に関わられる仕組み
 - ・地域の大人が気軽に子どもの見守りなどに関われるようにする。
 - ・区民が、区の子育て関連施策事業にボランティア的にサポートすることが可能な仕組みをつくる。
- 子育て家庭と地域の結びつき
 - ・子育て中の家庭と地域の人たちを結ぶ中間支援組織をつくる。
 - ・子ども会の活発化を図り、地域と子育て中の家庭の結びつきを強める。
- 南千住地域での児童サポート体制の強化
 - ・早期に南千住地域での児童サポート体制の強化を図る。
 - ・特に、汐入地域では子どもが増え PTA の活動だけでは子どもの見守りのサポートができないので、そのためのサポート体制をつくる。

具体的なアイデア

- 空き店舗を活用した地域の人に関われる子育て空間の確保
- 地域と子育て家庭を結ぶ仲介者制度

南千住地域グループのまとめ【子育て】

テーマ	現状や問題点	コミュニティカ向上のための課題	具体的なアイデアなど
子どもと大人・地域との交流を図ろう	<p>●地域の子どもとの関わりを持つことが困難</p> <ul style="list-style-type: none"> 元気な高齢者が子どもの見守りに参加したいと思っても、きっかけをつかめない。 区が行っている子育て事業は、区と子育て当事者として進められており、子育てに関心のある地域の人がある事業に関わるできない。 	<p>●子育て支援に簡単に关われる仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の大人が気軽に子どもの見守りなどに关われるようにする。 区民が、区の子育て関連施策事業にボランティア的にサポートすることが可能な仕組みをつくる。 	<p>○空き店舗を活用した地域の人が关われる子育て空間の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> 子育て支援と地域コミュニティとの機能を併せ持つ場として、商店街の空き店舗等を活用する。
	<p>●子育ての家庭が見えない</p> <ul style="list-style-type: none"> 子育て家庭が抱える課題を地域の人がかんく認識できない状況にある。 	<p>●子育て家庭と地域の結びつき</p> <ul style="list-style-type: none"> 子育て中の家庭と地域の人たちを結ぶ中間支援組織をつくる。 子ども会の活発化を図り、地域と子育て中の家庭の結びつきを強める。 	<p>○地域と子育て家庭を結ぶ仲介者制度</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域に総合的に关わりを持つ『エリアマネジメント制度』をつくる。 子ども家庭支援センターにエリアマネジメントを登録し、活躍する場を広げる。
	<p>●障がい児や病児の増加に対応する準備がない</p> <ul style="list-style-type: none"> 南千住地域は若い夫婦が急激に増えており、今後、子どもの数も増える。障がい児や病児が増える可能性があり、今の体制では、それらの子どもたちが安心して過ごせるようになっていない。 	<p>●南千住地域での児童サポート体制の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> 早期に南千住地域での児童サポート体制の強化を図る。 特に、汐入地域では子どもが増えPTAの活動だけでは子どもの見守りのサポートができないので、そのためのサポート体制をつくる。 	

3. 防犯 ～年齢や地域の特性、立場を活かしたコミュニティによる防犯の強化～

(1)現状や問題点

- 住宅街での犯罪の増加
- 危険な路地
- 区民には分かりづらい行政の防犯事業
- 区民には知られていない町会の防犯活動
- 効果の少ないパトロールや機能してない交番

(2)コミュニティ力向上のための課題

- 住宅街でできる防犯の推進
 - ・留守時の際など、隣家との協力関係が必要である。マンションのエレベーターの乗り降りは、子ども一人では乗らないように協力しあうことが大切である。
- 暗く危険な路地の解消
 - ・夜、暗く危険な路地をなくす。
- 行政の防犯活動情報の一本化
 - ・地域の安全に関わる活動や制度についての広報は、いろいろな機関で行われており分かりづらいので、できるだけ情報を一本化する。
- 区民の問題意識を引き出す町会活動
 - ・町会には、地域に埋もれている区民の問題意識、善意を引き出す工夫が必要である。
- 町会と地域との連携
 - ・防犯活動は町会単位で行うのが一般的だが、町会に加入していない家庭や町会加入率の低い地域からも参加者を積極的に募る必要がある。
 - ・町会は、学校や保育園に加え、マンション管理組合と連携を図るべきである。
 - ・町会は、各地域の特性に合った連携の仕方を構築する必要がある。
- 区による防犯事業の見直し
 - ・防犯パトロールはマイクの声が路地まで届くようにする。
 - ・交番は警官が常駐するようにする。

具体的なアイデア

- 住民による計画的な防犯活動
- 暗く危険な路地対策
- 行政の防犯施策の情報発信
- 区民による“第二区報”の発行
- 『地域安全連絡員』による町会と地域の連携
- 区のパトロール施策の拡充

南千住地域グループのまとめ【防犯】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ向上のための課題	具体的なアイデアなど
年齢や地域の特性、立場（住民、町会、行政）を活かした コミュニティによる防犯の強化	<p>●住宅街での犯罪の増加</p> <ul style="list-style-type: none"> 住宅地での空き巣、ひったくりが多発している。また、自転車の盗難が特に多い。 	<p>●住宅街でできる防犯の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 留守時の際など、隣家との協力関係が必要である。 マンションのエレベーターの乗り降りは、子ども一人では乗らないように協力しあうことが大切である。 	<p>○住民による計画的な防犯活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 住民自らが防犯活動の計画づくりを行うような区民運動を実施する。 住民団体や地域組織が中心となって、防犯標語の募集を行う。
	<p>●危険な路地</p> <ul style="list-style-type: none"> 南千住地域の閑静な住宅街の道は、明るい人通りが少なく、危険な道が多くある。南千住駅北側の線路東側の歩道は暗くて危険で、痴漢が出没する。 路地に街灯が少ない。街灯があっても、樹木や雑草で見えなくなっており、暗くて危険である。 	<p>●暗く危険な路地の解消</p> <ul style="list-style-type: none"> 夜、暗く危険な路地をなくす。 	<p>○暗く危険な路地対策</p> <ul style="list-style-type: none"> 区民による街歩き活動を実施し、暗い路地の発見や対応策を検討する。 区は、街灯のない細い路地について、各家庭でのセンサーライトの設置の補助金等を支援する。
	<p>●区民には分かりづらい行政の防犯事業</p> <ul style="list-style-type: none"> 防犯事業など地域の安全を担当する行政機関（区、警察等）のそれぞれの役割や取り組み内容、協力関係の有無などが分かりづらい。 防犯連絡所が名目だけで機能していない。 	<p>●行政の防犯活動情報の一本化</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の安全に関わる活動や制度についての広報は、いろいろな機関で行われており分かりづらいので、できるだけ情報を一本化する。 	<p>○行政の防犯施策の情報発信</p> <ul style="list-style-type: none"> 区のホームページで、各行政機関の防犯情報（ニュース、制度、活動広報、募集等）を収集し一元化し発信する。 <p>○区民による“第二区報”の発行</p> <ul style="list-style-type: none"> 防犯やまちづくりに関わるソフトな事柄だけを広報する “第二区報” を発行する。 “第二区報” の編集は、区民が参加して編集などの実務をする。

<p>●区民には知られていない町会の防犯活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 町会が行っている防犯活動はいろいろあるが、区民にあまり知られていない。 地域によって町会活動の有無や頻度が異なり、防犯活動が活発でない町会もある。特に、転出入が増加している地域（南千住四丁目）、町会があるが高齢化が進んでいる地域（南千住八丁目の一部）などでは防犯活動は活発でない。 	<p>●区民の問題意識を引き出す町会活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 町会には、地域に埋もれている区民の問題意識、善意を引き出す工夫が必要である。 <p>●町会と地域との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 防犯活動は町会単位で行うのが一般的だが、町会に加入していない家庭や町会加入率の低い地域からも参加者を積極的に募る必要がある。 町会は、学校や保育園に加え、マンション管理組合と連携を図るべきである。 町会は、各地域の特性に合った連携の仕方を構築する必要がある。 	<p>○『地域安全連絡員』による町会と地域の連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ボランティアを募集し、防犯、防災、交通安全を横断した(仮称)『地域安全連絡員』を設置する。 区が、町会加入について賃貸マンションも含めた全てのマンションに働きかけることによって、全体として防犯活動を高める。
<p>●効果の少ないパトロールや機能してない交番</p> <ul style="list-style-type: none"> 安全パトロールカーは大きい道を速く走り、細い道には入ってこない。パトロールとしての機能を果たさないことがある。 南千住八丁目の交番等には、警官がいないことが多くあり、交番としての機能を果たしてない。 	<p>●区による防犯事業の見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> 防犯パトロールはマイクの声が路地まで届くようにする。 交番は警官が常駐するようにする。 	<p>○区のパトロール施策の拡充</p> <ul style="list-style-type: none"> 「安全・安心パトロールカー」は大通りだけではなく、細い通りにも入って行く。 各種の防犯活動推進員には、団塊の世代、定年退職者に呼びかける。 パトロールカーの巡回の同乗者として、区の防犯講座等を受講したボランティアが参加できるようにする。 巡回場所は、身近に起きた犯罪の情報を町会長に集約し、それを基に町会長とパトロールする人とが相談しながら巡回するようにする。 パトロールのデータを蓄積する。

4. 福祉 ～行政の申請主義から福祉対象者掘起し主義へ～

(1) 現状

- 高齢者への情報伝達が困難
- 分かりにくい介護保険制度の手続き
- 負担の大きい民生委員の現状

(2) コミュニティ力向上のための課題

- 要介護高齢者を潜在化させないコミュニティ
 - ・現在の介護保険の手続きは、申請があった方に対応する仕組みになっているが、地域には潜在的な要介護高齢者が多くいる。
 - ・要介護高齢者を潜在化させない、民生委員、町会などとの地域コミュニティづくりをする。
 - ・「高齢者の孤独死ゼロ」を目指す地域コミュニティづくりをする。
- 地域でサポートする（仮称）民生委員協力員制度
 - ・住民や地域に関わる多様な人のコミュニティから、民生委員をサポートする（仮称）民生委員協力員をつくる。
 - ・新しくできた東京都の民生委員協力員制度を活用し、区としての独自の効果的な制度を検討する。

具体的なアイデアなど

- 区からの積極的な情報発信
- 介護保険制度手続きの改善
- （仮称）民生委員協力員養成講座の開催

南千住地域グループのまとめ【福祉】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ力向上のための課題	具体的なアイデアなど
行政の申請主義から福祉対象者掘起し主義へ	<p>●高齢者への情報伝達が困難</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新聞を取らない家庭も増えているので、区内全世帯に情報伝達されているわけではない。 ・ 区役所は敷居が高いところと思っている高齢者も多くいて、困っていても区役所に来ない、区に連絡を取ろうとしない人も多い。 ・ 介護が必要と思われる高齢者ほど、区役所等への連絡を取ろうとしない人が多い。 	<p>●要介護高齢者を潜在化させないコミュニティ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在の介護保険の手続きは、申請があった方に対応する仕組みになっているが、地域には潜在的な要介護高齢者が多くいる。 ・ 要介護高齢者を潜在化させない、民生委員、町会などとの地域コミュニティづくりをする。 ・ 「高齢者の孤独死ゼロ」を目指す地域コミュニティづくりをする。 	<p>○区からの積極的な情報発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 福祉に関わる情報、特に介護保険制度の情報は、区が高齢者全世帯にパンフレットを直接配布し、説明してまわる。 ・ 65歳になった人への記念式典（成人式のような行事）を行い、介護保険制度などの案内パンフレットを配布する。 ・ 65歳になった方全員への健康診断を実施し、介護対象者の発掘を行う。
	<p>●分かりにくい介護保険制度の手続き</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 介護保険制度の案内パンフレットは、特に介護が必要となるような高齢者にとっては分かりにくい。 		<p>○介護保険制度手続きの改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ パンフレット等は、介護を受ける人の立場や状況に応じた分かりやすい表記とする。 ・ 福祉に関わる情報、特に介護保険制度のような情報は、区が高齢者全世帯にパンフレットを直接配布し、説明してまわり、区が積極的に要介護高齢者を掘起すような仕組みをつくる。
	<p>●負担の大きい民生委員の現状</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 民生委員も高齢化し、また民生委員になる人も少なくなっている。 ・ 一人の民生委員が抱えている対象世帯は多すぎるのではないかと。また、民生委員も結果責任を問われるとなると、困っている人との関わりを持ちにくいのではないかと。 ・ 現在の民生委員制度は制度疲労しているのではないかと。 	<p>●地域でサポートする（仮称）民生委員協力員制度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 住民や地域に関わる多様な人のコミュニティから、民生委員をサポートする（仮称）民生委員協力員をつくる。 ・ 新しくできた東京都の民生委員協力員制度を活用し、区としての独自の効果的な制度を検討する。 	<p>○（仮称）民生委員協力員養成講座の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ （仮称）民生委員協力員になってくれる人を集めての養成講座を開催する。

Ⅱ. 荒川地域グループ

1. コミュニティ力向上のための課題 ～町会の情報伝達の方法を改善する～

(1)現状

●町会は人材不足に陥っている

- ・ コミュニティの核になるのは、町会・自治会である。
- ・ しかし、昼間仕事をしている人が参加しにくいなどの理由から、町会は人材不足になっている。
- ・ 町会は、区の情報提供の重要なルートであるが、上手く機能していない。
- ・ もともと職人の町だった荒川区にサラリーマン世帯が入ってきた。しかし、今はその比率が逆転している。その点を踏まえて対策を練る必要がある。

(2)コミュニティ力向上のための課題

●町会の情報伝達の方法を改善する

- ・ 区が情報提供の窓口になっているのは連合町会である。しかし、各連合会からその会議に出席する人数が少なすぎるせいか、各町会まで情報が浸透しない。
- ・ 区はさまざまな事業を行っている。それをもっと活用し、評価、改善していくことが必要である。
- ・ そのためには、町会の機能を強化して、区政情報をより地域に浸透させる必要がある。

具体的なアイデア

○マンション世帯町会加入の働きかけ

- ・ 区は、条例を活かしてマンション管理組合に町会への加入を働きかける。

○町会による情報伝達の仕組みづくり

- ・ 各連合会から3名ずつ、そのうち1名は婦人部会とするなど、情報伝達の方法を改善すべきである。

○小学校区・連合自治会単位のコミュニティ形成

- ・ 現在、100以上の町会があるが、これでは細かすぎる。小学校区程度の規模、世帯数では1000世帯以上あれば、町会も上手く機能できるのではないか。
- ・ 連合自治会を単位にしてコミュニティを考えたらどうか。

2. 子育て ～子どもと地域のつながりを再生する～

(1)現状や問題点

- 子育て世代の町会離れ
- お祭りをきっかけにしたつながり
- 子ども会の消滅と学校自由選択制

(2)コミュニティ力向上のための課題

●町会とマンション世帯のコミュニケーション

- ・ マンション世帯には、子どものいる世帯が多いので、コミュニティで子育てを考えるには、マンション世帯と地域との結びつきが必要である。
- ・ 町会以外には、マンション自治会だけでなく商店街もある。これらがばらばらであることが地域の結びつきづくりの障壁になっている。
- ・ マンションが自治会をつくらず、その地域の町会に入っている例もあり、そこではそれなりにコミュニケーションが図れているようである。
- ・ 町会もマンション自治会も商店街も同様に区が施策を行うべきである。

●若い世代・子どもと地域を継続的につなげる

- ・ 町会が主催するお祭りや防災訓練は、イベント事なのでその場限りの関わりになってしまう。コミュニティ形成のためには、「人を集めるイベント」だけではなく、「集めた人を橋渡しする」「結びつきが継続するようにサポートする」ことが大切である。
- ・ 若い世代に受け入れられるコミュニティ像とは、過去のしがらみやしきたりがないことと、コーディネーターの存在がとても重要である。

●児童館(現ひろば館)によるコーディネートノウハウの活用

- ・ その点、児童館(現ひろば館)のノウハウは参考になる。年齢別事業以外に、ひとりでも通えるような多目的に使えるスペースがあり、日常的で継続的な結びつきがつけられている。また、多世代の子どもたちが助け合って活動を行っており、その結びつきには、児童館(現ひろば館)の職員がコーディネーターとして重要な役割を果たしている。

●子ども達自身が事業を行うことが子どもを育てる

- ・ 行政が「区民に何をしてあげるか」ではなく、「区民に何ができるか」を考えることはコミュニティ形成にとって、時間がかかるが大切なことである。
- ・ 大人が子どもに「してあげる」事業ではなく、子ども達自身が「やる」事業が大切だ。子どもたちがリーダーになって動き出すと、とてもいい活動が生まれる。

●学校とコミュニティの結びつきをつくる

- ・ ひとつの学区に複数の町会があるために結びつきが作りにくい。
- ・ 校庭開放のルールも見直しが必要。別の学校の児童生徒は入れないのはおかしい。
- ・ 地域の中高生を小学校の校庭利用のリーダーとして育成したらどうか。

具体的なアイデア

- ひろば館を核にした子ども会の再生
- 校庭利用「子どもリーダー」の育成

荒川地域グループのまとめ【子育て】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ力向上のための課題	具体的なアイデアなど
子どもと地域のつながりを再生する	<p>●子育て世代の町会離れ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 最近の子育て世代は、町会と関わらなくても生活が事足りる。親が働いていると、なおさら関わりを持たなくなる。 ・ 子どもが、ひろば館や学校から防犯や地域の情報を持って帰ってくるため、親はそういった子どものネットワークを介して情報を得ることができる。 ・ 親同士も、保育園や学校を介したネットワークがあり情報を共有している。しかし、このコミュニティは地域全体への広がりを持っていない。 <p>●お祭りをきっかけにしたつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域にとっての町会の役割とは、ゴミの処理とお祭りの運営である。 ・ 子どもがいる世帯には、お祭りの際に声が掛かりやすく、お祭りが町会とのコミュニケーションのきっかけになる。 ・ お祭りをやるだけでは、一時的なつながりしか生まれないが、役員を持ち回り制にすると、町会運営に関する世代間の引継ぎが上手くいく場合がある。 	<p>●町会とマンション世帯のコミュニケーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ マンション世帯には、子どものいる世帯が多いので、コミュニティで子育てを考えるには、マンション世帯と地域との結びつきが必要である。 ・ 町会以外には、マンション自治会だけでなく商店街もある。これらがばらばらであることが地域の結びつきづくりの障壁になっている。 ・ マンションが自治会をつくらず、その地域の町会に入っている例もあり、そこではそれなりにコミュニケーションが図れているようである。 ・ 町会もマンション自治会も商店街も同様に区が施策を行うべきである。 <p>●若い世代・子どもと地域を継続的につなげる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 町会が主催するお祭りや防災訓練は、イベント事なのでその場限りの関わりになってしまう。コミュニティ形成のためには、「人を集めるイベント」だけではなく、「集めた人を橋渡しする」「結びつきが継続するようにサポートする」ことが大切である。 ・ 若い世代に受け入れられるコミュニティ像とは、過去のしがらみやききたりがないことと、コーディネーターの存在がとても重要である。 <p>●児童館(現ひろば館)によるコーディネートのノウハウの活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ その点、児童館(現ひろば館)のノウハウは参考になる。年齢別事業以外に、ひとりでも通えるような多目的に使えるスペースがあり、日常的で継続的な結びつきがつくられている。また、多世代の子どもたちが助け合って活動を行っており、その結びつきには、児童館(現ひろば館)の職員がコーディネーターとして重要な役割を果たしている。 	<p>○ひろば館を核にした子ども会の再生</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 区内のひろば館を活かし、そこを核にして子ども会を形成する。 ・ 区は、はじめのきっかけをサポートするコーディネーター役を担う。 ・ そこでは、子どもたちをリーダーとした事業を展開する。 ・ ひろば館で子どもが合宿をする際に、地域のお年寄りが昔話や戦争の話を聞かせるなど、世代間交流の取組みをやってみたい。
	<p>●子ども会の消滅と学校自由選択制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもが減少し子ども会が消滅したまま、新住民が入ってきており、子どもと地域をつなぐ受け皿がない。 ・ また、学校自由選択制が地域と子ども達の結びつきの障壁になっているのではないか。 	<p>●子ども達自身が事業を行うことが子どもを育てる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 行政が「区民に何をしてあげるか」ではなく、「区民に何ができるか」を考えることはコミュニティ形成にとって、時間がかかるが大切なことだ。 ・ 大人が子どもに「してあげる」事業ではなく、子ども達自身が「やる」事業が大切だ。子どもたちがリーダーになって動き出すと、とてもいい活動が生まれる。 <p>●学校とコミュニティの結びつきをつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ひとつの学区に複数の町会があるために結びつきが作りにくい。 ・ 校庭開放のルールも見直しが必要。別の学校の児童生徒は入れないのはおかしい。 ・ 地域の中高生を小学校の校庭利用のリーダーとして育成したらどうか。 	<p>○校庭利用「子どもリーダー」の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 青少連の「シニアリーダー」の仕組みを参考に、地域の中高生を、小学校の校庭利用のリーダーとして育成するプロジェクトを実施する。

3. 防犯 ～「犯罪から身を守る防犯」と「犯罪者をつくらない防犯」～

(1)現状や問題点

- 子どもの見守りの必要性
- 振り込め詐欺やひったくりの増加
- 見逃せないいじめや万引きなどの犯罪
- 協力体制にない親と学校の関係

(2)コミュニティ力向上のための課題

<犯罪から身を守る防犯>

- 地域と行政の両輪で防犯を進める
 - ・ 区の事業は片輪でしかなく、もう片輪は地域力である。両方の連携が重要だ。特に、自営業などで昼間に地域にいる大人が、他の家庭の子どもを守る意識、体制づくりができないか。
 - ・ 地域の見守りや通報など、住宅地を回る宅配便業者や郵便業者と連携を図れないか。
- 声を掛け合える、顔の見える関係をつくる
 - ・ 安心して過ごせる地域にするには、子どもだけでなく親も地域の行事に積極的に参加して地域の人々の顔を知り、声を掛け合えるまちにしたい。
- 区の防犯事業を周知する
 - ・ 地域が防犯を担うためには、パトロール事業などの区の事業を親たちが知ることが必要である。
- 犯罪情報を効果的に提供する
 - ・ 犯罪情報をすばやく知らせるにはどうしたらいいか。
 - ・ 犯罪の抑止力として音による広報の充実を。
 - ・ きめ細かな情報提供が必要である。

<犯罪者をつくらない防犯>

- 規範教育を進める
 - ・ 犯罪防止の教育が必要である。家庭、地域、学校で、犯罪を抑止するような教育が必要である。
- 学校と地域の協力体制を強化する
 - ・ 学校が地域や警察ともっと連携をはかり協力体制をつくるべきである。学校が警察や地域と協力体制があるかどうかは、児童の親にとって学校選びのポイントになる重要な点である。

具体的なアイデア

- マンション自治会・管理組合への呼びかけ
- 町会とPTAの連携づくり
- 地域で顔をあわせる仕組み
- 犯罪情報をリスト化した情報提供
- テーマを絞った情報提供
- 被害にあう前に気軽に相談できる場
- 非行防止のための教育の充実
- 学校行事や公開授業のPR充実
- 小学生と中学生のタテのつながりづくり

荒川地域グループのまとめ【防犯】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ力向上のための課題	具体的なアイデアなど
「犯罪から身を守る防犯」と「犯罪者をつくらない防犯」	<ul style="list-style-type: none"> ●子どもの見守りの必要性 <ul style="list-style-type: none"> ・ 警察によるパトロールが減ったように思うので、地域での防犯対策が重要である。 ●振り込め詐欺やひったくりの増加 <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもだけでなく、振り込め詐欺やひったくりの被害が多い。 	<p>＜犯罪から身を守る防犯＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地域と行政の両輪で防犯を進める <ul style="list-style-type: none"> ・ 区の事業は片輪でしかなく、もう片輪は地域力である。両方の連携が重要だ。特に、自営業などで昼間に地域にいる大人が、他の家庭の子どもを守る意識、体制づくりができないか。 ・ 地域の見守りや通報など、住宅地を回る宅配便業者や郵便業者と連携を図れないか。 ●声を掛け合える、顔の見える関係をつくる <ul style="list-style-type: none"> ・ 安心して過ごせる地域にするには、子どもだけでなく親も地域の行事に積極的に参加して地域の人の顔を知り、声を掛け合えるまちにしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○マンション自治会・管理組合への呼びかけ <ul style="list-style-type: none"> ・ 行政が、マンション管理組合もひとつの自治会とみなすような仕組みづくりに取り組む。 ○町会とPTAの連携づくり <ul style="list-style-type: none"> ・ 教育委員会が、PTAに対して働きかけを行い、町会との連携を図る。 ・ PTAは複数の町会にまたがった範囲で組織されるので、横の連携にも役立ち、防犯の取組みに対してとても重要な団体である。 ○地域で顔をあわせる仕組み <ul style="list-style-type: none"> ・ “防犯訓練”など名目をつけて、無理矢理にでも近所同士が顔をあわせる仕組みをつくる。
	<ul style="list-style-type: none"> ●見逃せないいじめや万引きなどの犯罪 <ul style="list-style-type: none"> ・ いじめや万引きなど、小さな犯罪行為は大きな犯罪の芽になるので見逃してはならない。 ・ そのためには、教育は根本的な対策だからこそ行政や学校が中心になって進めてほしい。 ●協力体制にない親と学校の関係 <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校と保護者が一緒に防犯を考える関係になっていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ●区の防犯事業を周知する <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域が防犯を担うためには、パトロール事業などの区の事業を親たちが知ることが必要である。 ●犯罪情報を効果的に提供する <ul style="list-style-type: none"> ・ 犯罪情報をすばやく知らせるにはどうしたらいいか。 ・ 犯罪の抑止力として音による広報の充実を。 ・ きめ細かな情報提供が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○犯罪情報をリスト化した情報提供 <ul style="list-style-type: none"> ・ 行政からの犯罪情報は、携帯やインターネットを使い、パッと見て分かりやすくする。 ○テーマを絞った情報提供 <ul style="list-style-type: none"> ・ 区からの情報提供は、盛りだくさんにせず、テーマを絞って単純明快にする。 ○被害にあう前に気軽に相談できる場 <ul style="list-style-type: none"> ・ ひとりで判断せず、気軽に相談できる場をつくる。
		<p>＜犯罪者をつくらない防犯＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ●規範教育を進める <ul style="list-style-type: none"> ・ 犯罪防止の教育が必要。家庭、地域、学校で、犯罪を抑止するような教育が必要である。 ●学校と地域の協力体制を強化する <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校が地域や警察ともっと連携をはかり協力体制をつくるべきである。学校が警察や地域と協力体制があるかどうかは、児童の親にとって学校選びのポイントになる重要な点である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○非行防止のための教育の充実 <ul style="list-style-type: none"> ・ PTAと学校が力を合わせ、規範教育を充実させる。 ○学校行事や公開授業のPR充実 <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の大人が日ごろから学校に行く機会を増やす。子どもとのコミュニケーションも図れる。 ○小学生と中学生のタテのつながりづくり <ul style="list-style-type: none"> ・ 中学生が卒業した小学校の面倒をみるような地域でのタテのつながりづくりを行う。手本となっている意識が働けば自然と中学生の非行防止に役立つ。

4. 福祉 ～孤独のない地域に～

(1)現状

- 一人暮らし高齢者と情報不足
- お互いに無関心になりがちな地域
- 活動団体の細分化とコーディネート不足
- 福祉施策の優先度にある違和感

(2)コミュニティ力向上のための課題

- 区の情報提供の徹底
 - ・ 情報提供の方法について、苦情が出るからといって中止しては効果が出ない。きちんと説明しながら効果的だと考える方法を貫く姿勢が必要である。
 - ・ 「欲しい情報は自分で取る」ことにし、必要以上に情報を流さない方向に切り替えたかどうか。
- “隣組”のような小さい組織による情報伝達
 - ・ 情報提供は口コミが最も効果的である。町会よりももっと少人数の集団をつくり、リーダー役がいれば情報が各個人に伝わるのではないか。
- 地域にちょっとした相談相手を
 - ・ 町会長や区役所では敷居が高いので、困ったときにちょっと相談できるもっと身近な人が地域にいるといい。
- 団体同士の連携を図る
 - ・ 社会福祉協議会、民生委員、町会など、それぞれの当事者同士が参加して話し合い、ヨコの連携を図る場が必要である。もしくはコーディネートする機能が必要である。
- 福祉施策の優先順位を区民が考える
 - ・ 医療費や高齢者福祉に関する財政について、優先順位の決定に区民も関わりたい。
 - ・ 区議会議員は、福祉分野のどこに重点を置くのかを選挙の際に明確に示してほしい。
 - ・ 介護する側、子育てする側が今なにを求めているのかを把握し、障がい者福祉も高齢者福祉も一緒に考えないと財源の取り合いになってしまう。

具体的なアイデアなど

- 話し相手ボランティア
- 相談相手をつくる運動

荒川地域グループのまとめ【福祉】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ力向上のための課題	具体的なアイデアなど
孤独のない地域に	<p>●一人暮らし高齢者と情報不足</p> <ul style="list-style-type: none"> 区内に、一人暮らしの高齢者は約8500人（平成17年の国勢調査）。特別養護老人ホームについては現在約100床分の確保が進んでいるが、更なる整備が必要である。 高齢者登録の制度は自己申告主義である。（登録者は約2000人）。情報不足から支援を受けられない人が多い。 <p>●お互いに無関心になりがちな地域</p> <ul style="list-style-type: none"> 今の子育て世代は人と関わろうとしない人が多く、お互いに無関心である。 縁側や茶の間に上がり込んで話すことが少なくなった。商店街は、コミュニケーションの場として機能するのではないか。 	<p>●区の情報提供の徹底</p> <ul style="list-style-type: none"> 情報提供の方法について、苦情が出るからといって中止しては効果が出ない。きちんと説明しながら効果的だと考える方法を貫く姿勢が必要である。 「欲しい情報は自分で取る」ことにし、必要以上に情報を流さない方向に切り替えたらどうか。 <p>●“隣組”のような小さい組織による情報伝達</p> <ul style="list-style-type: none"> 情報提供は口コミが最も効果的である。町会よりももっと少人数の集団をつくり、リーダー役がいれば情報が各個人に伝わるのではないか。 <p>●地域にちょっとした相談相手を</p> <ul style="list-style-type: none"> 町会長や区役所では敷居が高いので、困ったときにちょっと相談できるもっと身近な人が地域にいるといい。 	<p>○話し相手ボランティア</p> <ul style="list-style-type: none"> 全ての人が自分から積極的に出掛けられるとは限らない。引っ込み思案な人も多い。かといって、いきいきサロンのような場所も既存のグループが仕切っているなどして閉鎖的な雰囲気である。 一人暮らしの高齢者が一番望んでいるのは、話し相手になってくれる人だ。話を聞いてあげるだけなら、町会などがボランティアでできる。いわば、「時間ボランティア」。 <p>○相談相手をつくる運動</p> <ul style="list-style-type: none"> 一人暮らし高齢者に、相談相手を一人でも見つけるお手伝いをする運動を提案する。町会は、各高齢者に相談相手がいるかどうかを確認する。 相談相手は、ボランティアグループをつくってもよい。「おせっかいおばさん」「おせっかいおじさん」運動。ただし、ネーミングはもう少し考えた方がよい。 高齢者に限らず、区内に引っ越してきた人にも「おせっかい」をしてあげるといい。 人選は、町会の役員だけではなく、新しい地域の担い手も加えるべきである。
	<p>●活動団体の細分化とコーディネート不足</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域に分野別の団体が数多くあり、活動内容にダブりがある。それらの団体がそれぞれ町会に協力を求めてくるので対応しきれない。 	<p>●団体同士の連携を図る</p> <ul style="list-style-type: none"> 社協、民生委員、町会など、それぞれの当事者同士が参加して話し合い、ヨコの連携を図る場が必要である。もしくはコーディネートする機能が必要である。 	
	<p>●福祉施策の優先度にある違和感</p> <ul style="list-style-type: none"> ホームヘルパーの仕事は重労働の割に時給が安く、その仕事だけでは生活できない。 満15歳までは医療費無料の政策をとっている。 	<p>●福祉施策の優先順位を区民が考える</p> <ul style="list-style-type: none"> 医療費や高齢者福祉に関する財政について、優先順位の決定に区民も関わりたい。中学生の医療費無料はやりすぎで、他にまわすべき部分があるのではないか。 区議会議員は、福祉分野のどこに重点を置くのかを選挙の際に明確に示してほしい。 介護する側、子育てする側が今なにを求めているのかを把握し、障がい者福祉も高齢者福祉も一緒に考えないと財源の取り合いになってしまう。 	

Ⅲ. 町屋地域グループ

1. コミュニティ力向上のための課題 ～『少しのおせっかい』ができるまち～

(1) コミュニティの現状

●ご近所ネットワークが形成できていない

- ・ 地域に住む住民同士がお互いの顔を知らないため、挨拶すらできないし、困っている人がいたとしても気づけない。
- ・ 子どもに声をかけようとしても、お互い顔見知りではないため不審者扱いされる。
- ・ コミュニティの核となるべき町内会の活動が住民に伝わってこない。何をしているか分からないので、コミュニティ形成の核になりにくい。

●コミュニティの活動と自分の生活とのバランスをきちんと取れるようにすることが大事

- ・ 一時的に手助けをする事はできるしその気持ちもあるが、それが「常に」となると自分の生活もあるので難しい。
- ・ 余った時間でできる事以上の手助けは、実際には専門家の支援が必要である。

(2) コミュニティ力向上のための課題

●町会に代わる新しい核となる場の形成

- ・ 困っている本人や困っている人を見つけた人が、手助けを受けるきっかけが得られる『駆け込み寺』や『居場所』のような場所を地域に設ける。
- ・ 地域の情報を集約する機能を、誰もが知っている施設に設置する。

●余った時間を利用して地域貢献のできる仕組みづくり

- ・ ボランティア活動をしたかったときに、気軽に参加できる仕組みをつくることで、広く浅く助け合いの環をつくる。

●新しいご近所ネットワークの形成

- ・ 昔のような密度の濃いお付き合いはできないが、「顔見知り」である状態を形成することが重要である。

具体的なアイデア

○声掛け運動の実施

- ・ 民生委員や町内会の役員など、声を掛けることが不自然でない人を中心に、挨拶などの声かけ運動を行う。

○コミュニティの核となる場を既存の施設に設置

- ・ 困ったときの相談窓口、困っている人を見つけた際に相談できる場、ちょっとしたおしゃべりなどができる場、ボランティアの受付窓口など、コミュニティに関するあらゆることを扱う場所を既存施設内に設置し、運営を各種専門家と住民ボランティア、施設管理者で運営する。

○CATVやインターネット等による地域情報の提供

- ・ 住民間の地域情報の格差を少なくし、必要な地域情報を手に入れやすくするために、CATVやインターネット等による地域情報の提供を行う。
- ・ 行政は、全ての世帯が自宅でCATVやインターネット等で配信される情報を見ることが出来るよう支援する。

2. 子育て ～既存支援メニューの隙間に手が届くサポートを～

(1)現状

- 子育て支援策のミスマッチ
- 集団での遊びの不足

(2)コミュニティ力向上のための課題

- 地域で子育て支援を受けられる仕組み
 - ・ 既存の支援メニュー以外に、子育て中の親が本当に困ったときに気軽に助けてくれる人々が近所に居ることが必要である。
 - ・ 毎日ではできないかも知れないが、都合のよいときにいつでもサポートに入れる状況であると安心である。
 - ・ そのためには、地域の世帯同士が気軽に声を掛け合える状態であることが必要である。
- 地域で子どもがいろいろな遊びを体験できる場
 - ・ ボール遊びができる公園づくりなど、子供の遊び方に合わせたハード面での場づくりが必要である。
 - ・ そこには、子供が興味を持つ遊びを体験できる仕掛けがあるといい。
- 遊び場での子供の見守り
 - ・ 事故が起こった場合に備え、公園等の子供の遊び場には大人の見守りが必要である。

具体的なアイデア

- かゆいところに手が届く支援体制づくり
- 子育て中の親同士が話し合える居場所
- 町内会を単位としたお祭りの活性化
- 子育てに関する中核施設の設置
- 親がいなくても子供が楽しめる場づくり
- プレイパークの運営

町屋地域グループのまとめ【子育て】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ力向上のための課題	具体的なアイデアなど
既存支援メニューの隙間に手が届くサポートを	<p>●子育て支援策のミスマッチ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子育て中の親同士で情報交換がしたい。 ・ 子どもが病気でも、面倒を見てくれる人が欲しい。 ・ 障がいを持つ親の子育てをサポートして欲しい。 	<p>●地域で子育て支援を受けられる仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 既存の支援メニュー以外に、子育て中の親が本当に困ったときに気軽に助けてくれる人々が近所に居ることが必要である。 ・ 毎日とはできないかも知れないが、都合の良いときにいつでもサポートに入れる状況であると安心である。 ・ そのためには、地域の世帯同士が気軽に声を掛け合える状態であることが必要である。 	<p>○かゆいところに手が届く支援体制づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもをお風呂に入れるサービスや、病気の子どもを預かってくれるサービスなど、行政の既存メニューでは対応できない子育て支援を。 <p>○子育て中の親同士が話し合える居場所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家に引きこもりがちで行き場のない専業主婦が気軽に立ち寄りおしゃべりができ、子育て中の親同士で情報交換できる場を地域の中につくる。 <p>○町内会を単位としたお祭りの活性化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 皆が関心を持ちやすいきっかけなので、お祭りに力を入れることで住民が集まってきて、交流ができる。 <p>○子育てに関する中核施設の設置</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域ごとに経験者の話を聞くことができるサポートステーションをつくる。 ・ ふれあい館などの公共施設で、ボランティアが協力し子育て支援センター的な機能を持たせる。
	<p>●集団での遊びの不足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今の子どもは、習い事等で忙しく、公園等で遊ぶことが少ないため、集団での遊びに慣れていない。 	<p>●地域で子どもがいろいろな遊びを体験できる場</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ボール遊びができる公園づくりなど、子供の遊び方に合わせたハード面での場づくりが必要である。 ・ そこには、子供が興味を持つ遊びを体験できる仕掛けがあるといい。 <p>●遊び場での子供の見守り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事故が起こった場合に備え、公園等の子供の遊び場には大人の見守りが必要である。 	<p>○親がいなくても子供が楽しめる場づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 町内会が顔つなぎ役となり、幼稚園児、小学生、中学生、高校生等が年齢を超えて交流できる場をつくる。 ・ 子供会を再結成し、地域に住む子供同士が集まれるようにする。 <p>○プレイパークの運営</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 世田谷の羽根木プレイパークのような、大人が常駐し子供が創意工夫で思う存分遊べる公園を運営する。

3. 防犯 ～コミュニケーションを密にし目に見える防犯対策を～

(1)現状

- 登下校の子どもの安全に不安
- 中高生の夜間外出は危険
- 振り込め詐欺やひったくり犯罪が増加
- 夜間暗い場所の不安
- 機能していない交番
- 夜間外出の安全性確保

(2)コミュニティ力向上のための課題

- 地域で子どもを見守るために
 - ・ 地域の子ども達に普段から声掛けができるような環境づくりが必要である。
 - ・ 一方、障がい児への防犯対策が不足している。
- 区によるパトロールの推進
 - ・ 「安全・安心パトロールカー」や防犯ベストを着た人が歩くのは防犯に効果がある。
 - ・ ボランティアで防犯ベストを着てパトロールしている者の立場からすると、仕事として活動する人々と、無給で参加しているボランティアと、見分けが付くようにしてほしい。
- 犯罪への対処経験の必要性
 - ・ 振り込め詐欺や痴漢などの被害に遭ったときの対応方法を知ることが子どもから大人まで必要である。
- リアルタイムでの犯罪情報の提供
 - ・ 犯罪情報がリアルタイムで携帯電話に伝達されるとよい。
- 新たな防犯灯の設置
 - ・ 防犯灯は、近隣からは「まぶしい」といって嫌がる声がある。安全性と静かな生活とのバランスが難しいが、暗い所に防犯灯の設置は必要である。
- 新たな防犯拠点の設置
 - ・ 街中のパトロールはもちろん必要だが、交番という拠点にも警官が常にいることが必要である。
 - ・ コンビニを区の防犯拠点のひとつとして位置づけられないか。

具体的なアイデア

- 登下校時の障がい児を地域で見守る
- 防災無線で見守りの呼びかけ
- 地域での声掛け推進
- 防犯パトロールの一本化
- 『危険マップ』の作成
- 犯罪対処のシミュレーションの場
- 防犯活動のPR
- リアルタイムな防犯情報の提供
- 警察とのコミュニケーション

町屋地域グループのまとめ【防犯】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ力向上のための課題	具体的なアイデアなど
コミュニケーションを密にし目に見える防犯対策を	<p>●登下校の子どもの安全に不安</p> <ul style="list-style-type: none"> 障がい児は自宅付近のバス停から自宅までの行き来が不安である。 小学生は、学童から自宅までの送迎があるため防犯対策は十分である。 地域で過ごしている子どもにコミュニケーションが取りづらい。 	<p>●地域で子どもを見守るために</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の子供達に普段から声掛けができるような環境づくりが必要である。 一方、障がい児への防犯対策が不足している。 	<p>○登下校時の障がい児を地域で見守る</p> <ul style="list-style-type: none"> 障がい児のバス停から家までの送迎を、地域のボランティアが登録制で実施したらどうか。 毎日親が同伴すると親が疲れてしまうので、親のサポート体制として実施する。 <p>○防災無線で見守りの呼びかけ</p> <ul style="list-style-type: none"> 下校時間に防災無線で通学路の見守りを呼びかける。
	<p>●中高生の夜間外出は危険</p> <ul style="list-style-type: none"> 今の中高生は、夜遅くまで遊んでいて、犯罪に巻き込まれる率も上がっているのでは。 	<p>●区によるパトロールの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 「安全・安心パトロールカー」や防犯ベストを着た人が歩くのは防犯に効果がある。 ボランティアで防犯ベストを着てパトロールしている者の立場からすると、仕事として活動する人々と、無給で参加しているボランティアと、見分けが付くようにしてほしい。 	<p>○地域での声掛け推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 未成年者が犯罪等に巻き込まれないように地域で声をかける。 不審者に間違えられないよう、地域の行事の際に声掛け運動をPRする。 <p>○防犯パトロールの一本化</p> <ul style="list-style-type: none"> 火の用心や子どもパトロール等の地域で実施されているパトロールを一本化し、定期的に何らかのパトロールが実施されるよう地域で調整する。
	<p>●振り込め詐欺やひったくり犯罪が増加</p> <ul style="list-style-type: none"> 高齢者をねらった振り込め詐欺被害が増加している。 荒川ゆうネットでひったくりが多いという情報が流れているが、対策が取れないか。 	<p>●犯罪への対処経験の必要性</p> <ul style="list-style-type: none"> 振り込め詐欺や痴漢などの被害に遭ったときの対応方法を知ることが子どもから大人まで必要である。 	<p>○『危険マップ』の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> 小学生から見た『危険マップ』を作成し、子どもの見守りやパトロールに活用する。 <p>○犯罪対処のシミュレーションの場</p> <ul style="list-style-type: none"> 荒川CATVで『今回の防犯シミュレーションコーナー』などをつくる。 ひろば館・ふれあい館や高齢者施設など各世代が集まる拠点で、防犯対策を体験する場を設ける。 そこでは町会が中心となり、専門家に講義をお願いする。
	<p>●夜間暗い場所の不安</p> <ul style="list-style-type: none"> 一階が駐車場のマンションや尾久の原公園、尾久橋付近、第五中学校のそばの大きな工場付近は防犯灯が無く夜間は不安を感じる。 	<p>●リアルタイムでの犯罪情報の提供</p> <ul style="list-style-type: none"> 犯罪情報がリアルタイムで携帯電話に伝達されるとよい。 <p>●新たな防犯灯の設置</p> <ul style="list-style-type: none"> 防犯灯は、近隣からは「まぶしい」といって嫌がる声がある。安全性と静かな生活とのバランスが難しいが、暗い所に防犯灯の設置は必要である。 	<p>○防犯活動のPR</p> <ul style="list-style-type: none"> センサーライトを人家や死角に設置し、人がいることを分かるようにする。 防犯のぼりや提灯を裏通りに設置する。 商店街で防犯の掲示や放送を行う。 <p>○リアルタイムな防犯情報の提供</p> <ul style="list-style-type: none"> TVで区政情報が手に入るようにする。

	<p>●機能していない交番</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 近所の交番にいつも警官が居ないので、どこに駆け込めばよいか心配である。荒木田の交番はいつも警官がいない。交番は昔より頼りにならない。 <p>●夜間外出の安全性確保</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ コンビニが24時間開いているため、夜間でも安心して歩ける。コンビニに防犯機能があるとよい。 	<p>●新たな防犯拠点の設置</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 街中のパトロールはもちろん必要だが、交番という拠点にも警官が常にいることが必要である。 ・ コンビニを区の防犯拠点のひとつとして位置づけられないか。 	<p>○警察とのコミュニケーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 交番にいる警官と地域とのコミュニケーションを密にする。 ・ 警官が不在の時に、退職した警察官が詰めるような体制がとれないか。 ・ コンビニに駆け込んできた人に対し、警察や保護者に連絡するなどの支援を今後も引き続き行う。
--	---	---	--

4. 福祉 ～少しのおせっかいで困っている人を支援できる環境をつくる～

(1)現状

- 高齢者介護の支援の必要性
- 障がい者に対する支援
- 父子家庭や家庭内離婚世帯への公的支援
- 子どもが困っていることに気づかない親
- 声を上げられない人への支援
- 施策の対象から漏れてしまう人の存在

(2)コミュニティ力向上のための課題

- 困っている人を発見しやすい環境づくり
 - ・ 困っていることを察知できる環境づくりを行っていく。
 - ・ 少しのおせっかいを大人からすべきである。
- 何かあったときの『駆け込み寺』の設置
 - ・ 困ったときに駆け込める場所を皆が知っている所に設置することで、困った人を放置しない仕組みが必要である。
- 気軽に末永くボランティアができる仕組みづくり
 - ・ 専門的なことはボランティアでは手に負えないが、自分の特技や余った時間を気軽に提供できるようなボランティアの仕組みが必要である。
 - ・ 善意だけでは長続きしないので、モチベーションが継続する仕組みがあるとよい。
 - ・ 有償のスタッフと、無償のボランティアの役割分担も必要である。
- お互い様になれる仕組みづくり
 - ・ 支援を受けるばかりでなく、場合によってはボランティアをする側になれるような仕組みであるとよい。
 - ・ 地域通貨のようなものを介在させ、支援を受けた対価を支払ったり、ボランティア報酬を受け取れるような仕組みがあるとよい。

具体的なアイデア

- 困っている人を見つけて通報できる仕組み
- 『半歩のおせっかい』の実践
- 地域の公的な場所に『駆け込み寺』を設置
- 手軽にボランティアができる仕組み
- ボランティアのマイレージ化の仕組み

町屋地域グループのまとめ【福祉】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ向上のための課題	具体的なアイデアなど
少 し の お せ っ か い で 困 っ て い る 人 を 支 援 で き る 環 境 を つ く る	●高齢者介護の支援の必要性 <ul style="list-style-type: none"> 介護する側も高齢者の場合がある。介護する家族の負担が大きく、介護者がうつ病を発症することもある。 一人暮らしの高齢者は本人が介護を必要としていなくても、周りから見ると介護が必要な場合もある。 	●困っている人を発見しやすい環境づくり <ul style="list-style-type: none"> 困っていることを察知できる環境づくりを行っていく。 少しのおせっかいを大人からすべきである。 	○困っている人を見つけて通報できる仕組み <ul style="list-style-type: none"> 困っている人を見つけたときに、専門家がカウンセリング等を行うなどの対応につながるよう、地域の中で通報できる部署や場所をつくる。
	●障がい者に対する支援 <ul style="list-style-type: none"> 地域で自立して住むには周りの人々の支援が不可欠だが、障がい者は地域と交流していないことが多い。 親は子どもの障がいを隠しがちなため、実は誰にも言えず困っている人も多いのではないか。 	●何かあったときの『駆け込み寺』の設置 <ul style="list-style-type: none"> 困ったときに駆け込める場所を皆が知っている所に設置することで、困った人を放置しない仕組みが必要である。 	○『半歩のおせっかい』の実践 <ul style="list-style-type: none"> 挨拶や気遣いの声掛けなど、ちょっとしたおせっかいにより近所の顔つなぎを意識的に行う。 庭の草むしりや、室内の地震対策など、周りが必要だと思っけていても本人が自覚していない場合を対象に、まずはおせっかい的にやってみる。
	●父子家庭や家庭内離婚世帯への公的支援 <ul style="list-style-type: none"> 母子家庭と比較して父子家庭は支援を受けにくいのではないか。 DVで離婚できない世帯は一人親世帯と見なされず、一人親世帯向けのサービスが原則受けられない。 	●気軽に末永くボランティアができる仕組みづくり <ul style="list-style-type: none"> 専門的なことはボランティアでは手に負えないが、自分の特技や余った時間を気軽に提供できるようなボランティアの仕組みが必要である。 善意だけでは長続きしないので、モチベーションが継続する仕組みがあるとよい。 有償のスタッフと、無償のボランティアの役割分担も必要である。 	○地域の公的な場所に『駆け込み寺』を設置 <ul style="list-style-type: none"> ふれあい館のような公的な場所に、子どもや高齢者、介護者などのあらゆる年齢層の困った人が、気軽に足を運ぶことができる場所の設置。 困ったときに相談できる様々なものが集約されるとよい。
	●子どもが困っていることに気づかない親 <ul style="list-style-type: none"> 学童保育終了後から親が帰宅するまでの間、子どもが困っていることを親が深刻に受け止めていないケースが見受けられる。 	●気軽に末永くボランティアができる仕組みづくり <ul style="list-style-type: none"> 専門的なことはボランティアでは手に負えないが、自分の特技や余った時間を気軽に提供できるようなボランティアの仕組みが必要である。 善意だけでは長続きしないので、モチベーションが継続する仕組みがあるとよい。 有償のスタッフと、無償のボランティアの役割分担も必要である。 	○手軽にボランティアができる仕組み <ul style="list-style-type: none"> 雨樋の掃除など、簡単な事でもちょっと困ったときに手助けを求められる仕組みになるとよい。 ボランティアをする側も、空いた時間を使って無理なく続けられるとよい。 縫い物や大作業など、特技を登録して、特技を発揮できる場になるとよい。 初心者は具体的に何をすればよいか分からない場合があるので、ボランティアへの指示ができるコーディネーターのような役割を果たす人が必要である。
	●声を上げられない人への支援 <ul style="list-style-type: none"> 助けてと言える人は普段から近所づきあいのある人。近所づきあいのない人は助けを求められない。 	●お互い様になれる仕組みづくり <ul style="list-style-type: none"> 支援を受けるばかりでなく、場合によってはボランティアをする側になれるような仕組みであるとよい。 地域通貨のようなものを介在させ、支援を受けた対価を支払ったり、ボランティア報酬を受け取れるような仕組みがあるとよい。 	○ボランティアのマイレージ化の仕組み <ul style="list-style-type: none"> 荒川区でボランティアをした結果を『マイレージ』のポイント化し、地方に住む自分の親の介護サービスへの支払いに利用できるとよい。
	●施策の対象から漏れてしまう人の存在 <ul style="list-style-type: none"> 介護保険や障がい者手帳、子育てサービスなど、行政のサービス体系は対象者を限定しているため、その枠に当てはまらず漏れてしまう人もいる。枠を緩やかにできないか。 		

IV. 尾久地域グループ

1. コミュニティ力向上のための課題～地域資源を活かしたネットワークづくり～

(1) 現状

●地域組織間の連携がうまくいっていない

- ・ 地元の祭り組織と町会とのつながりが薄く、また、町会と商店街等との地域活動の連携の機会が少なくなっている。
- ・ マンションの自治組織は地域との協力関係が弱い。
- ・ SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）を活用した若者の地域ネットワークがあるが、地域組織との連携がない。

●地域資源が豊富だが活用されていない

- ・ 地域には元学校の先生など指導者、首都大学東京荒川キャンパス（保健医療分野）や東京女子医科大学東医療センター、東京外国語大学国際交流会館など、豊富な地域資源があるが地域活動との結びつきが弱い。

(2) コミュニティ力向上のための課題

●地域資源を活かせる拠点の場づくり

- ・ 拠点づくりをコミュニティづくりにつなげ多様な活動を行う。
- ・ 地域情報が集まり、地域活動団体同士が交流する核とする。
- ・ 若い人のネットワークや子育て世代のネットワークを活かした拠点づくりを考える。
- ・ 住民の視点から地域課題と役割分担を明確にして、情報発信の場としていく。

●キーパーソンを見つける

- ・ 地域活動のネットワークを形成するため、新しい人材であるキーパーソンを発見し、地域組織のつながりを考える。

具体的なアイデア

○空き施設を活用した住民参加の拠点づくり

- ・ 商店街の空き店舗や学校の空き教室を利用して住民参加で活動の拠点づくりを行う。

○拠点が有効に機能するための条件を確保する

- ・ 区民に自由に開かれ参加しやすい施設運営を基本にして、幅広く参加を呼びかけ、また、公募募集し、皆で運営方法を決める。

○マンションへの町会加入の働きかけ

- ・ 条例を活用し、マンション建設時期から事業者にも町会の参加を申し入れる。

○国際交流による地域づくり

- ・ 拠点を姉妹都市（ドイツ）からの訪問客が宿泊できるような施設にして、国際交流をすることを通じて地域づくりを進める。

○学校や大学・若者のネットワークをコミュニティに結びつける

- ・ 学校連絡協議会を活用し、学校と地域を結びつける。
- ・ 首都大学・東京女子医大学生寮、東京外国語大学交際交流館のスタッフや学生と交流を深めてネットワークを形成する。
- ・ SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）を活用した若者のネットワークを地域づくりに活かす。

2. 子育て ～地域資源を活用した次世代を担う子どもの育成～

(1)現状

- 青少年の生活スタイルの変化
- 子どもの施設や子育て情報の集まる場の不足
- 地域組織間連携の不足
- 地域資源が豊富だが活用されていない
- 若者のネットワークがある

(2)コミュニティ力向上のための課題

- 子どもに関する場づくり
 - ・ 地域で子育てや幼児教育の相談場所をつくる。
 - ・ 小中高大学生の交流や、地域と小中高校の関係者が意見交換のできる機会や場を設ける。
 - ・ 地域で子どもを育てる視点から、小学校は通学区域方式に戻すべきである。
- 地域資源を活かせる拠点づくり
 - ・ 地域資源を活かしたあらゆる活動の拠点をつくりたい。
 - ・ 活動拠点となる場ができれば、今後、地域貢献型の多様な活動が区民の手でできる。
 - ・ 町会に頼るのではなく、子どもや大人が集まる場と組織を考えていくことが必要である。
 - ・ 若者のネットワークや子育て世代のネットワークを活かした拠点づくりを考える。
- 拠点をコミュニティづくりにつなげる
 - ・ 活動拠点の運営は、利用者がばらばらに利用するだけにならないように工夫する必要がある。現在の拠点は、コミュニティの創出、人材育成につながらない。
- キーパーソンを見つける
 - ・ 地域ネットワークのキーパーソンは、既存の団体の長ではない、新しい人材であるべきである。キーパーソンをどのように発見し、どのように地域とつなげるかを考える必要がある。

具体的なアイデア

- 空き施設を利用した拠点づくり
- 拠点における幅広い活動の運営
- 外国人をもてなす地域づくり
- 学校や大学・若者と連携したネットワーク形成

尾久地域グループのまとめ【子育て】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ力向上のための課題	具体的なアイデアなど
地域資源を活用した次世代を担う子どもの育成	<p>●青少年の生活スタイルの変化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 青少年を見ると、感動や共感の反応に乏しく、社会や組織のルールや規範が身につけていない。小中学校時代に多様な世代と接し、集団で何かをする機会が少なくなっているが原因だろう。 ・ 街の整備が進み、子どもが外で遊ぶ場がない。しかし、子どもたちの自主的な活動の芽があり、支援をしたい。 <p>●子どもの施設や子育て情報の集まる場の不足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 尾久地域には保育所が少なく、ファミリー層が流出している。 ・ 小中高校生が学習する場や他人と接する総合型の地域の施設が不十分である。 ・ 地域には共働き家庭が多いが、子育ての情報や相談する場がない。 ・ 学校自由選択制で親のつながりが弱くなった。 ・ しかし、先生と地域の交流があればいろいろなことが可能ではないか。 <p>●地域組織間連携の不足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 町会と商店街等の地域活動の連携が少なくなっている。地元の祭りの組織と町会とのつながりも薄くなっている。 ・ マンションの自治組織は地域との協力関係が弱い。 <p>●地域資源が豊富だが活用されていない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 尾久地域には、元学校の先生など指導者が多いが、活動する場がない。 ・ 尾久地域には首都大学東京荒川キャンパス（保健医療分野）や東京女子医科大学東医療センター、東京外国語大学国際交流会館など、豊富な地域資源がある。 <p>●若者のネットワークがある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ mixi（ミクシー）には、20～30歳代を中心に、荒川区内に約2,000人、東尾久地域に約800人が参加している。まちづくりやボランティア活動への関心も強い。 	<p>●子どもに関する場づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域で子育てや幼児教育の相談場所をつくる。 ・ 小中高大学生の交流や、地域と小中高校の関係者が意見交換のできる機会や場を設ける。 ・ 地域で子どもを育てる視点から、小学校は通学区域方式に戻すべきである。 <p>●地域資源を活かせる拠点づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域資源を活かしたあらゆる活動の拠点をつくりたい。 ・ 活動拠点となる場ができれば、今後、地域貢献型の多様な活動が区民の手でできる。 ・ 町会に頼るのではなく、子どもや大人が集まる場と組織を考えていくことが必要である。 ・ 若者のネットワークや子育て世代のネットワークを活かした拠点づくりを考える。 <p>●拠点をコミュニティづくりにつなげる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 活動拠点の運営は、利用者がばらばらに利用するだけにならないように工夫する必要がある。 ・ 現在の拠点は、コミュニティの創出、人材育成につながっていない。 ・ 北海道のよさこい祭りなどの他地域の事例から学び、拠点づくりのリーダーを育てる。 <p>●キーパーソンを見つける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域ネットワークのキーパーソンは、既存の団体の長ではない、新しい人材であるべきである。 ・ キーパーソンをどのように発見し、どのように地域とつながるかを考える必要がある。 	<p>○空き施設を利用した拠点づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 商店街の空き店舗や学校の空き教室を利用し、地域で管理する活動拠点をつくる。 ・ 計画段階から住民の運営協議会を設立して検討を進める。運営協議会は、幅広い人が参加するものとする。 ・ 荒川山吹ふれあい館の蓄積されたノウハウを活用して使いやすい施設とする。 ・ 単なる貸館にせず、キッズルームやキッチン、飲食可などの運営、花壇などを設ける。 ・ 姉妹都市からの外国の人や、田舎から親類がたずねてきたときのゲストハウスのような要素が欲しい。 ・ 総合的にいろいろな活動で利用でき、また、空間が一体となっている施設とする。 <p>○拠点における幅広い活動の運営</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもだけで遊ぶ環境、外遊びできる環境をつくり、大人は何かあったときにフォローできる方式とする。 ・ 入学進級時に親子のマナー教育を実施するなど、家庭教育のあり方を考える場を設ける。 ・ 東京の緑を守るための森林ボランティアなど、将来の地球環境問題に取り組む。 ・ 子育てや医療の相談、高齢福祉、外国人との交流などを実践的に行う。 ・ 独自のHPを持って活動の紹介を行う。 <p>○外国人をもてなす地域づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 拠点を利用して、姉妹都市（ドイツ）からの訪問客が宿泊できるような施設にし、東京外国語大学国際交流館と連携して運営する。 ・ 地域の生の暮らしぶりを見てもらいつつ、国際交流をすることを通じて地域づくりを進める。 <p>○活動のネットワーク形成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校連絡協議会や首都大学東京荒川キャンパス（保健医療分野）や東京女子医科大学大学生寮との交流を深めてネットワークを形成する。

3. 防犯 ～皆の目や声が届きやすいまちにする～

(1)現状

- 広がる危険なまちのたたずまい
- 子どもを見守る体制の弱体化
- 効果の出にくい防犯活動
- 防犯に関する情報不足

(2)コミュニティ力向上のための課題

- 防犯機能が高いまちのあり方
 - ・住民と区がまちのたたずまいをどうしていくかを考え、まちづくりを進めていく必要がある。
 - ・子どもの安全のため、地域と学校、保護者との連携が必要である。
 - ・マンション入居時に町会からマンション住民に地域参加を働きかけるべきである。
 - ・荒川区は防犯の状況は現段階ではよいため、現状を維持していくという考え方が必要である。
- 交番を核として防犯活動を連携させる
 - ・地域の防犯活動が連携できる場をつくり、相乗効果を発揮させたい。
 - ・警察は、警察官がまちに出て、地域の皆の声を聞くようにし、地域と協力して防犯に積極的に取り組む。
 - ・交番に防犯活動の核としての機能を持たせる。
- 地域の生きた情報をやり取りできる仕組み
 - ・子どもが知っている犯罪情報や地域の生きた情報を防犯活動に活かしたい。
 - ・子どもの防犯情報を把握した親が、相談できるコミュニティをつくる。

具体的なアイデア

- 皆の目や声が届く下町のよさを活かしたまちづくり
- 地域組織と関係機関が情報交換や連携できる仕組み

尾久地域グループのまとめ【防犯】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ向上のための課題	具体的なアイデアなど
皆の目や声が届きやすいまちにする	<p>●広がる危険なまちのたたずまい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ まちの中に、住民の視線がとどかない空間が多くなり、公園など危険な場所が増えている。 ・ 少し前までは、家々からまちに目が届くような開放性があったが、マンションが増え、まちのつくりが変わってきた。 <p>●子どもを見守る体制の弱体化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの安全確保のためにマンション居住の人も地域とのかかわりを求めており、子ども会にはマンションに住む子どもも増えてきた。 ・ 学校選択制になって地域と学校、保護者との連携が弱くなった。 ・ 顔のわかる、身近な付き合いのできるまちをつくる必要がある。 <p>●効果の出にくい防犯活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 防犯活動を熱心にやっているが時間帯やコースが機械的に決められているため、効果が薄い。 ・ いろいろな部署で防犯活動がばらばらに行われ、効果的ではない。 	<p>●防犯機能が高いまちのあり方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 住民と区がまちのたたずまいをどうしていくかを考え、まちづくりを進めていくことが必要である。 ・ 子どもの安全のため、地域と学校、保護者との連携が必要である。 ・ マンション入居時に町会からマンション住民に地域参加を働きかけるべき。 ・ 荒川区は防犯の状況は現段階ではよいため、現状を維持していくという考え方が必要である。 <p>●交番を核として防犯活動を連携させる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の防犯活動が連携できる場をつくり、相乗効果を発揮させたい。 ・ 警察は、警察官がまちに出て、地域の皆の声を聞くようにし、地域と協力して防犯に積極的に取り組む。 ・ 交番に防犯活動の核としての機能を持たせる。 	<p>○皆の目や声が届く下町のよさを活かしたまちづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ みんなの目がとどく、開放性のある下町のよさを活かしたまちづくりをしたい。 ・ 条例を活用し、マンション建設時期から入居者が町会に参加するよう申し入れ、事業者の連絡窓口を登録制にして責任を明確にする。 ・ 交番をまちの目立つところに移転し、犯罪情報が届きやすいようにする。 ・ 小学生を地域の学校に通学させつつ、学校自由選択制の趣旨を活かし、家庭を中心に半径何 Km の範囲で通学できる学校を選択する方法とする。
	<p>●防犯に関する情報不足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 犯罪情報が地域に伝わらないため対応が不十分になっている。 	<p>●地域の生きた情報をやり取りできる仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもが知っている犯罪情報や地域の生きた情報を防犯活動に活かしたい。 ・ 子どもの防犯情報を把握した親が、相談できるコミュニティをつくる。 	<p>○地域組織と関係機関が情報交換や連携できる仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 町会や商店街、PTA などの多様な地域組織が防犯に関する情報交流交換する場の形成と、インターネットで情報を機敏にやり取りする仕組みをつくる。

テーマ	現状や問題点	コミュニティ力向上のための課題	具体的なアイデアなど
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">安全なまちをつくる</p>	<p>●交差点周辺の危険</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本町通交差点は、舗装が悪く少しスピードを出すと大きくバウンドし危険である。 ・ 交差点の横断時間が短く、お年寄りには危険である。 ・ 周辺は歩道と車道の段差があり、お年寄りが転びやすい。 ・ 配送車が交通量の多い時間帯に交差点の目の前で停車し、大変危険である。 <p>●自転車マナーの欠如</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 無灯火の自転車が多い。 ・ 地域の人が通勤や通学で使う道路の歩道に放置自転車が多く、危険である。通行区分帯のわかりやすい表示を行うべきである。 	<p>●本町通交差点周辺の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 舗装状況、歩道との段差、信号の横断時間、配送者の駐車など総合的に見直し、対策を立てる。 ・ 配送車両の荷捌きスペースを道路に確保する。 	<p>○道路補修時における区の安全確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 区は、道路を補修する段階で立ち会い、現場で道路の安全性を確認する。 ・ 道路管理者である都と区の連携を強化する。 <p>○自転車専用道の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在工事中の高架下（日暮里・舎人ライナー）に自転車専用レーンを整備する。

4. 福祉 ～介護を柱に、地域での相互扶助の仕組みをつくる～

(1)現状

- 矛盾を感じる福祉制度
- 限定的な福祉サービス
- ボランティア活動における個人情報保護の壁

(2)コミュニティ力向上のための課題

- 高齢者の自立を支援する
 - ・ シルバー人材センターの仕事の内容を拡大し、お年寄りが地域で自立した生活ができるようにする。
- 地域情報が集まる核をつくる
 - ・ 地域のボランティアの担い手と受け手の情報が共有できる交流の場をつくる動きがある。また、商店街には地域の情報が集まる。尾久地域では、商店街から情報を発信収集の動きがあるので活用する。
- 地域で活動団体同士が交流する場をつくる
 - ・ 荒川区にはユニークな活動があるが、それらが上手くつながっていないので、地域のボランティアや社会福祉協議会との協力により地域の情報共有や団体の交流のための場をつくる。
 - ・ 介護保険制度についても、ボランティアの実態や福祉施策などを知らないと十分な対策が考えられない。荒川区の福祉を総合的に話し合える場があるとよい。

具体的なアイデア

- 利用者の働きかけによる介護保険制度の改善
- 地域のボランティアを組み合わせたケアプランを作成できるケアマネージャーの育成
- 介護保険の隙間を支えるボランティア等の育成
- 地域の人材の活用

尾久地域グループのまとめ【福祉】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ力向上のための課題	具体的なアイデアなど
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">介護を柱に、地域での相互扶助の仕組みをつくる</p>	<p>●矛盾を感じる年金制度や介護保険制度</p> <ul style="list-style-type: none"> 年金天引き制度は、生活保護ぎりぎりの人に深刻な影響が出ている。制度見直しが必要である。 生活保護世帯の給付は月13万円なのに、基礎年金は6万円である。制度に矛盾を強く感じる。 介護保険制度は、全国一律なので使い勝手が悪い部分がある。 介護サービスの認定やケアプランが機械的に行われ、不適切な内容になりがちである。また、家族がいると介護サービスが制限される場合もある。 <p>●ボランティア活動における個人情報保護の壁</p> <ul style="list-style-type: none"> 荒川区はボランティアが活発だが、個人情報保護の壁や、受け手がボランティア情報に疎いことが原因でサービスの提供者と受け手が情報を共有できず、地域の相互扶助ができにくい状況である。 	<p>●高齢者が住みやすいまち</p> <ul style="list-style-type: none"> お年寄りがシルバーカーに腰掛けているのを見かけるので、街での移動をし易くするため、道路などにベンチを設ける。 シルバー人材センターの仕事の内容を拡大し、お年寄りが地域で自立した生活ができるようにする。 <p>●地域情報が集まる核をつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域のボランティアの担い手と受け手の情報が共有できる交流の場をつくる動きがある。また、商店街には地域の情報が集まる。尾久地域では、商店街から情報を発信収集の動きがあるので活用する。 <p>●地域で活動団体同士が交流する場をつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> 荒川区にはユニークな活動があるが、それらが上手くつながっていないので、地域のボランティアや社会福祉協議会との協力により地域の情報共有や団体の交流のための場をつくる。 介護保険制度についても、ボランティアの実態や福祉施策などを知らないとなかなか対策が考えられない。荒川区の福祉を総合的に話し合える場があるとよい。 	<p>○利用者の働きかけによる介護保険制度の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> 介護を必要とする人が気楽に声を出す場をつくり、活用して、介護制度の改善内容を社会に訴え、改善する。 家族を介護している男性の集まる「男性介護者の会」が活発に活動しているので、これと地域のボランティアが交流で、荒川区の介護体制の水準を上げる。 <p>○地域のボランティアを組み合わせたケアプランを作成できるケアマネージャーの育成</p> <ul style="list-style-type: none"> 介護対象者の日頃の状況を家族からよく聴き、適切なケアプランを作成するケアマネージャーを育成する。 区、社会福祉協議会は、地域のボランティア活動、区の独自施策と介護保険のサービスを組み合わせたケアプランが作成できるケアマネージャーを育成する。 <p>○介護保険の隙間を支えるボランティア等の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> 介護保険制度のメニューにはないが、現場で必要とされるサービスをターゲットに、区独自の訪問看護師の活用や有償ボランティアを組織する。 家事援助をボランティアが行い、専門的な介護サービスを集中的に受けられるようにする。 また、設置数の多いデイサービス施設の利用向上を図るため、送迎のボランティアを増やす。 <p>○地域の人材の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域に関心のある20～30歳代の世代の力と感覚をボランティア活動に活かせるとよい。 看護師等の資格保有者は、長い間現場を離れていると技術進歩に対するリスクがあり社会復帰が難しいので、研修制度などを導入し、社会復帰を促す。
	<p>●限定的な福祉サービス</p> <ul style="list-style-type: none"> 介護を受ける人は自由度の高い家事援助サービスを望んでいる。 洗濯、家事、買い物などはボランティアが担当するようにし、専門的な介護サービスを介護保険制度にのっとって利用しやすいようにする。 配食サービスは対象が限定的である。母子家庭や障がい者など、サービスを必要としている人が他にもいる。 		

V. 日暮里地域グループ

1. コミュニティ力向上のための課題 ～困ったときに頼りにできるコミュニティ～

(1)現状

●住民と地域とのつながりが薄くなってきている

- ・ 住民のニーズが多様化して、町会に頼る機会が少なくなり、地域と住民とのつながりが薄くなってきている。
- ・ 行政サービスは充実してきているが、サービスからはみ出してしまう人もいる。行政サービスでは補いきれないきめ細やかな対応が必要である。

●町会の体力低下

- ・ 町会はマンパワー不足に陥っている。

(2)コミュニティ力向上のための課題

●住民が困ったときに頼りにできるコミュニティづくり

- ・ コミュニティは限定的な範囲にこだわらず、広く捉えるべき。組織間の相互ネットワークをつくるのが大事である。
- ・ 町会は、コミュニティの土台となる組織になるべき。町会の参加者を増やして体力を強化する。
- ・ そのためには、地域の中で相互の情報交換をしやすくすることが必要である。

具体的なアイデア

○地域に出る、地域と交流できるきっかけとなる場をつくる

- ・ 友達ができる、話し相手を見つける場、「そこに行けば地域や福祉サービスの情報がわかる」という場をつくる。
- ・ 公共施設は施設によって利用者が制限されてしまう。交流の場とするためには、間口を広くして誰でも使えること、いつでも開いていることが大事である。

○なるべく多くの人を参加させるような啓発活動

- ・ 行政から区全体にまんべんなく広く情報提供し、地域参加を啓発する。

○地域をつなぐコーディネーター役をつくる

- ・ 町会に行政と、地域活動、地域の人々をつなぐコーディネーターになる人を育てる。
- ・ 行政情報を地域の人たちに伝えるために、地域の知恵者を醸成し、常にたまり場にいるようにする。そこに行けば情報があるとわかる仕組みにする。

2. 子育て ～子育てに必要な場所や支援を親が自由に選べる環境づくり～

(1)現状

- 地域で子育てをする機会の減少
- 子どもを通じた親同士の交流の増加
- よりよい子育て条件を求めて動く家庭の存在
- 親が子どもに参加させたいようなイベントが少ない
- 子育て施設の配置に偏りがある
- 地域コミュニティの媒介機能を担う学校
- 学校と地域との関係の変化
- 子育て情報の伝達不足

(2)コミュニティ力向上のための課題

- 親が自由に選択できる子育てコミュニティの重要性
 - ・ コミュニティは目的によっていろいろな形がある。地域の枠にとらわれるのではなく、もっと広い範囲で考えるべきである。人と人との関わりの範囲がコミュニティになる。
- 子どもが主体的に企画できるイベントの実施
 - ・ 子どもが参加したいと思うイベントにするためには、大人ばかりが企画するのではだめである。子どもが自分で考えて企画するなど、子どもの意見を取り入れて、子どもが主体的に参加できるイベントにする。
- 子育て施設の利用拡大
 - ・ 子育て施設を地域のどこからでも不便なく利用できるようにする。
- 放課後の学校開放の推進
 - ・ 学校開放はよいことであるので続けるべきである。
- 区の子育て支援情報の伝達
 - ・ 行政が進めている子育てに関するたくさんの事業を伝えることが必要である。
 - ・ 専業主婦やマンションに住んでいる家庭が情報をつかみやすくすることが必要である。

具体的なアイデア

- 既存イベントを活用した子どもの集いのきっかけづくり
- 施設の利用制限の緩和
- 区報を有効活用した子育て支援の情報提供
- 親の意見を聴く場の設置

日暮里地域グループのまとめ【子育て】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ向上のための課題	具体的なアイデアなど
子育てに必要な場所や支援を親が自由に選べる環境づくり	<p>●地域で子育てをする機会の減少</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子育て家庭を町会に引き込みたいが、町会が子育ての担い手になるのは難しいし、子育て家庭も町会に支援を求めている。 ・ 町会での子育て支援を進めているが、役員が高齢のため問題点を見出せないでいる。 ・ 現代は情報量が多く選択肢が広がった。家庭で抱える問題の解決方法も多様になり、子育てを町会に頼ることが少なくなった。 ・ 子どもの地域への参加は、親の意向など家庭環境による影響が大きい。地域に溶け込みたくても溶け込めない子どもがいるのが事実である。 <p>●子どもを通じた親同士の交流の増加</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの友達付き合いやクラブ活動を通じて親同士が交流する。子育ての方法を相談しあえたり、培われた関係は子育てが終わってからも生きている。 <p>●よりよい子育て条件を求めて動く家庭の存在</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ より充実した子育て支援策のある自治体に移転する家庭が多く、地域に根づかない。 ・ 子どもの地域への参加は親の意向など家庭環境による影響が大きい。 	<p>●親が自由に選択できる子育てコミュニティの重要性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニティは目的によっていろいろな形がある。地域の枠にとらわれるのではなく、もっと広い範囲で考えるべきである。人と人との関わりの範囲がコミュニティになる。 ・ 「子育てを地域で」というのは理想だが、実際の関係づくりは難しい。 ・ 今の親たちは子育てに関して地域のコミュニティを必要としていない。今の家庭は子育てに必要なPTA、生活共同組合などの組織を自由に選択できる。親が必要だと思うものを選択してつくられるコミュニティが子育ての上では重要である。 	
	<p>●親が子どもに参加させたいようなイベントが少ない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の子どもを集めて集団で遊ばせるイベントを開催している。たくさんの子どもたちが集まり、よい活動なので今後も続けたい。 ・ 町会のイベントなど、子どもたちが集うきっかけはあるが、なかなか子どもたちが参加しない。 	<p>●子どもが主体的に企画できるイベントの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもが参加したいと思うイベントにするためには、大人ばかりが企画するのではだめである。子どもが自分で考えて企画するなど、子どもの意見を取り入れて、子どもが主体的に参加できるイベントにする。 	<p>○既存イベントを活用した子どもの集いのきっかけづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもに絵本を配る事業を、何らかのイベントと組み合わせさせて子どもが集う機会として活用する。

	<p>●子育て施設の配置に偏りがある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日暮里地域は、東西に広く起伏もあるため、離れた施設に行きにくい。特にふれあい館、ひろば館の位置が地域ごとに偏りがあり使いにくい。 ・ 日暮里地域には、子育て交流サロンや遊び場、交流の場が少ない。 	<p>●子育て施設の利用拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子育て施設を地域のどこからでも不便なく利用できるようにする。 	<p>○施設の利用制限の緩和</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童館を誰でも平等に利用できるようにする。 ・ 民間マンションのコミュニティールームを地域に開放する。
	<p>●地域コミュニティの媒介機能を担う学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 昔は学校生活の場が、子どもや親の情報交換の場になっていた。 ・ 学校は地域をつなぐ場として重要である。 ・ 日暮里地域内でもそれぞれ地域性があり、小学校ごとのお祭りの特徴が違う。 <p>●学校と地域との関係の変化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校自由選択制が導入され、地域とのつながりが希薄になった。しかし、その原因は親の地域への意識も関わっているのではないか。 ・ 区外の学校に通う子どもたちは、地域の行事に区外の友達を連れて来たり、逆に区外の行事に遊びに行ったりしている。 	<p>●放課後の学校開放の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校開放はよいことであるので続けるべきである。しかし、責任を誰が取るべきかが今後の課題である。 	
	<p>●子育て情報の伝達不足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 行政が進めている子育て支援事業はたくさんあるが、情報が伝わっていない。特に専業主婦の方に情報が伝わりにくい。 ・ 子育てをする上で一番役立ったのは、親同士の口コミ情報だった。 	<p>●区の子育て支援情報の伝達</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 行政が進めている子育てに関するたくさんの事業を伝えることが必要である。 ・ 専業主婦やマンションに住んでいる家庭が情報をつかみやすくすることが必要である。 	<p>○区報を有効活用した子育て支援の情報提供</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子育て支援事業の情報提供にもっと区報を活用すべきである。 <p>○親の意見を聴く場の設置</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 区政改革懇談会のような場を活用し、今の親の意見を聴く場を設ける。

3. 防犯 ～住民と地域とのつながり強化と区の防犯事業の充実～

(1)現状

- 町会の体力低下
- 住民にとって地域の人「知らない人」
- 悪質な犯罪の増加
- 行政の防犯施策の実効度は町会によってムラがある

(2)コミュニティ力向上のための課題

- 町会の透明性確保と活性化
 - ・ 町会活動は歴史が古く、町会の役割や魅力がなくなっている。時代が変わり、昔のような共同社会を担う場がなくなった。新しい協働にあわせて町会の新陳代謝を進めるべき。
 - ・ 町会をもっとオープンにして誰でも気軽に出られるようにするだけでなく、町会もどんな人を求めているかが分かるように発信する事が大事である。
- 家庭と地域との接点づくり
 - ・ 地域の行事に家族ぐるみで参加して顔を見せ、知り合うことが必要である。また、日頃のあいさつなどちょっとした声かけで顔見知りになることが第一歩になる。
 - ・ 家庭から地域につながる事が大事で、そのためには家庭での教育を行う。
- 自分のまちに対する意識の向上
 - ・ 自分のまちは自分で守る、という意識づくりが大事である。
- 地域強化のためのきめ細やかな支援
 - ・ 防犯に関する基本的な支援は区の最低限の役割だが、それ以上は地域と区が相互のコミュニケーションを図り、必要なサービスを提供することが必要である。

具体的なアイデア

- 地域をつなぐコーディネーター役をつくる
- 西日暮里4丁目にコミュニティスペース
- 親子イベントの実施
- 企業の地域参加の推進
- 東日暮里 1～3 丁目における基本的な防犯対策
- 防犯パトロールの充実

日暮里地域グループのまとめ【防犯】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ力向上のための課題	具体的なアイデアなど
住民と地域とのつながり強化と区の防犯事業の充実	<p>●町会の体力低下</p> <ul style="list-style-type: none"> 町会に意見や提案をしても伝わらない。透明性のある活動をしてほしい。 町会はマンパワー不足である。もっと元気のある人を入れていく必要がある。 <p>●住民にとって地域の人「知らない人」</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域のつながりがないので、近所の人・地域の人「知らない人」になってきている。 周りに無関心で、できれば関わりたくないという気持ちの強い人が多い。 民生委員などの地域活動について知らない人が多い。 	<p>●町会の透明性確保と活性化</p> <ul style="list-style-type: none"> 町会活動は歴史が古く世襲化し、希薄化している。時代が変わり、昔のように半強制的に活動に参加してもらうことはできなくなった。なるべく新しい人も含めて多くの人の参加が必要である。 町会をもっとオープンにして誰でも気軽に出られるようにするだけでなく、町会もどんな人を求めているか分かるように発信する事が大事である。 コミュニティが一部の人だけでなく、地域全体のものになるとよい。 地域のよさは住んでいる人にはわかりにくい。客観的に外から見た意見を聴くことも大切である。 <p>●家庭と地域との接点づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の行事に家族ぐるみで参加して顔を見せ、知り合うことが必要である。また、日頃のあいさつなどちょっとした声かけで顔見知りになることが第一歩になる。 家庭から地域につながる事が大事で、そのためには家庭での教育を行う。 	<p>○地域をつなぐコーディネーター役をつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> 町会に行政と、地域活動、地域の人々をつなぐコーディネーターになる人を育てる。 行政情報を地域の人たちに伝えるために、地域の知恵者を醸成し、常にたまり場にいるようにする。そこに行けば情報があるとわかる仕組みにする。 <p>○西日暮里4丁目にコミュニティスペース</p> <ul style="list-style-type: none"> 西日暮里4丁目には、人が集まる場所がないため、地域とつながれるきっかけになるようなコミュニティスペースを設置してほしい。 <p>○親子イベントの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 親子限定の銭湯無料デーというイベントがある。子どもがいると、親同士も話をするきっかけができ、親子のつながりをもてる。 <p>○企業の地域参加の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 企業の社会的責任として、地域社会への参画を導入するよう働きかける。
	<p>●悪質な犯罪の増加</p> <ul style="list-style-type: none"> 犯罪者の犯罪の悪質化、巧妙化、組織化が進み、いくら法律を整備してもその網をかいくぐってくる。こうした悪質犯罪に地域の力ではとても太刀打ちできない。 <p>●行政の防犯施策の実効度は町会によってムラがある</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政の防犯施策は充実しているが、実際の実効度にムラがある。 行政は防犯アドバイザー派遣をやっているが、活用するか否かは町会次第である。 	<p>●自分のまちに対する意識の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分のまちは自分で守る、という意識づくりが大事である。 <p>●地域強化のためのきめ細やかな支援</p> <ul style="list-style-type: none"> 防犯に関する基本的な支援は区の最低限の役割だが、それ以上は地域と区が相互のコミュニケーションを図り、必要なサービスを提供することが必要である。 	<p>○東日暮里1～3丁目における基本的な対策</p> <ul style="list-style-type: none"> 東日暮里1～3丁目は開発でまちの状況が変わったため、地域コミュニティの機能が低下している。行政はパトロールなど治安を維持するための最低限の対策を強化してほしい。 <p>○防犯パトロールの充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 犯罪にあわないように注意を呼びかける活動を推進する。特に日暮里地区は昨年度の数字で他の地区より3倍も犯罪率が高いため、行政・警察が主導でパトロールに取り組んでほしい。 振り込め詐欺の注意を呼びかけるチラシをつくって案内板に掲示する。

4. 福祉 ～個人の意向を尊重しつつ、困ったときに支えあえるコミュニティづくり～

(1)現状

- 地域に憩える場所・居場所の不足
- 行政サービスで補えない細かい問題
- 福祉サービスの情報不足
- 個人情報保護と地域の見守り
- 対象ごとに縦割された福祉施策

(2)コミュニティ力向上のための課題

- 交流と情報共有のための場づくり
 - ・ 地域が福祉のためにできることは「場づくり」である。
 - ・ 友達ができる、話し相手を見つけられる、そこに行けば地域や福祉サービスの情報がわかる場が必要である。
 - ・ 場ができ、つながりができれば、行政に今までやってもらっていたことも自分たちでできるようになる。
- 地域での見守り活動の充実
 - ・ 一人暮らしの高齢者に、心をかけ、声をかける事が大事である。日常の人間関係をベースに、近所から信頼関係をつくる。
 - ・ 必要な情報を伝えることが大切である。
- 民生委員の活動の充実
 - ・ 行政や民生委員を通じた支援を充実させることが望ましい。
 - ・ ただし、民生委員の普段の活動だけでは見えないこともあるので、区民からの率直な意見も聴きながら活動してほしい。
- 社会参加のための条件整備
 - ・ 高齢者、障がい者、子どもがよりよい社会参加を果たすための条件づくりが大事である。ハード面でのバリアフリーの地域づくりは進んでいるが、社会的弱者のニーズを知る機会をつくることが重要である。

具体的なアイデア

- 既存施設や民間施設の活用によるたまり場
- インターネットを媒体にした情報伝達と交流の機会づくり
- 地域の知恵者の醸成
- コミュニティ内での情報共有
- 民生委員と町会の連携強化

日暮里地域グループのまとめ【福祉】

テーマ	現状や問題点	コミュニティ力向上のための課題	具体的なアイデアなど
<p style="writing-mode: vertical-rl; font-weight: bold;">困ったときに支えあえるコミュニティづくり 個人の意向を尊重しつつ、</p>	<p>●地域に憩える場所・居場所の不足</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の住民が憩えるスペースがない。地域にたまるスペースは多めにつくるべきである。 <p>●行政サービスで補えない細かい問題</p> <ul style="list-style-type: none"> 区の事業・施設は充実しつつある。しかし、そこからはみ出てしまった人のケアがどうなるか心配である。 <p>●福祉サービスの情報不足</p> <ul style="list-style-type: none"> 福祉を受けたい方に必要なサービスの情報が届かない。 福祉に関する情報はよく掲示板に出ているので、そこをよく見ている人は知っているが、そうでない人は情報を知らないことが多い。 	<p>●交流と情報共有のための場づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域が福祉のためにできることは「場づくり」である。 友達ができる、話し相手を見つけられる、そこに行けば地域や福祉サービスの情報がわかる場が必要である。 福祉施設は、施設によって利用者が制限されてしまう。交流の場とするためには、間口を広くして誰でも使えるようにするべきだ。 場ができ、つながりができれば、行政に今までやってもらっていたことも自分たちでできるようになる。 	<p>○既存施設や民間施設の活用によるたまり場</p> <ul style="list-style-type: none"> ひろば館、学校などの公共施設の一部を使い、常に使えるたまり場をつくる。 また、再開発が行われる場合には、コミュニティのためのスペースを確保するよう働きかける。 コミュニティカフェ（私設）、グループスペース（町会）などをつくる。 <p>○インターネットを媒体にした情報伝達と交流の機会づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> インターネットを有効に使い、行政情報を提供する。情報の受け手側が情報を取得する力を高めるために、高齢者や障がい者向けインターネット講座を開いたり、使い放題のパソコンを設置することを併せて行う。子どもが高齢者にインターネットを教えれば交流が生まれる。 <p>○地域の知恵者の醸成</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政の情報を地域の人たちに伝えるために、地域の知恵者を醸成し、常にたまり場にいるようにする。そこに行けば情報がある仕組みにする。
	<p>●個人情報保護と地域の見守り</p> <ul style="list-style-type: none"> 人には話したくないこともあると思うが、地域として支えるためには知っておきたいこともある。そのジレンマが大きい。 人との関わりをもたない、持ちたくない人への見守りはどうすべきか。 	<p>●地域での見守り活動の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 一人暮らしの高齢者に、心をかけ、声をかける事が大事である。日常の人間関係をベースに、近所から信頼関係をつくる。 全ての情報を知らせる必要はなく、必要な情報を伝えることが大切である。 <p>●民生委員の活動の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政や民生委員を通じた支援の充実。 ただし、民生委員の普段の活動だけでは見えないこともあるので、区民からの率直な意見も聴きながら活動してほしい。 	<p>○プライバシーの体系化</p> <ul style="list-style-type: none"> プライバシーを公（パブリック）、共（コミュニティ）、私（プライベート）の3つで考える。 今は、公と私だけで考えているので、情報を出す、出さないという二極化が起きている。共の領域を含めれば、情報の取り扱いがしやすくなるはずである。 <p>○民生委員と町会の連携強化</p> <ul style="list-style-type: none"> 民生委員は地域の情報を持っているので、民生委員の活動をもっと知ってもらうために町会に入って町会との関わりを強くする。
	<p>●対象ごとに縦割された福祉施策</p> <ul style="list-style-type: none"> 高齢者福祉、障がい者福祉、子ども施策、地域防犯、保育など、コミュニティを軸に縦割を排除し、連携すべきである。 	<p>●社会参加のための条件整備</p> <ul style="list-style-type: none"> 高齢者、障がい者、子どもがよりよい社会参加を果たすための条件づくりが大事である。 ハード面でのバリアフリーの地域づくりは進んでいるが、社会的弱者のニーズを知る機会をつくる。 	

活動報告

1. 平成19・20年度荒川区区政改革懇談会委員名簿

南千住地域グループ	尾久地域グループ
石井 富江	浅見 隆弘
牛丸 美代子	梶 雅俊
岡野 正隆	加藤 徳美
下村 美恵子	神達 五月雄
杉本 洋平	小山 博
千葉 智祥	佐々木 豊勝
樋田 武	杉本 剛史
荒川地域グループ	鈴木 功一
安部 義治	関口 明
市川 正夫	高橋 明弘
後藤 宏道	増永 明美
斉藤 なみ	山崎 律子
坂場 洋子	横井 伸洋
櫻井 善忠	吉野 宏
筑本 知子	日暮里地域グループ
文村 秀哲	新井 妙子
前田 淳一	井上 啓
町屋地域グループ	小川 順一郎
荒川 不二夫	久保田 剛
大村 みさ子	中城 正憲
織田 邦雄	三浦 眞佐恵
川村 絹恵	山川 モモ子
高見 和幸	吉澤 陽美
手塚 薫	吉田 忠一
村田 記代子	和田 みどり
山田 眞人志	
吉田 俊行	
鷲見 志雄	

敬称略・五十音順

2. 活動経過

